

# エリック・デイビスの覚書

エリック・デイビスとウィルソン提督との会談(Eric Davis Meeting with Adm. Wilson)

[Eric Davis meeting with Adm. Wilson - DocumentCloud](#)

[エリック・W・デイビス \(EWD\)](#)：著名な宇宙物理学博士、オースチン高等研究所の上級研究員で推進システム、エネルギー、相対性原理を研究。

[トマス・R.ウィルソン提督 \(TW\)](#)：米国防情報局長（1999年7月～2002年7月在任）

詳しくは「エリック・デイビスの覚書についての解説」を参照のこと。

以下〔 〕はデイビスが覚書に追加した部分。

リッチがグリア・パラダイスにある米国防産業 [EG&G](#) 特別プロジェクト棟に行くぞ。午前10時の約束だ。遅刻するなよ！と言う。

2002年10月16日午前10時から(訳注：つまりウィルソン提督の局長退役後3か月たった頃)

10時10分（提督遅れて到着）

提督は2人の制服着用の海軍士官を連れて到着。提督自身はスーツ姿。彼は現在退役している。

制服着用は大尉と司令官。下士官が車を運転。

## ウィルソン提督との会談

我々はEG&Gビルの裏手で彼が手配した車の座席に座っている。

午前11時20分まで会談の予定。

他の連中も会談に同席するため、車から出てビル内に入る（10時10分）。

TW（ウィルソン提督）：ハロー！さきほど[国立ユニフォームド・サービス大学](#)（訳注：最先端の軍事関連の研究もする大学）の名簿で君の履歴を見たよ。

リッチがくれた空軍物理学論集もね。

君がどういう人物かは分かった。

履歴と論集を照らし合わせると、君という人物が浮かび上がる。

君がどんな人物かということがな！！（笑う）

君の方はわしのキャリア、情報局の経歴などについては聞きたくないだろう！！

EWD（エリック）：はい！その通りです！

TW：わしはオーク・シャノンと電話で話したことを覚えている。

1999年秋[8月]のことだ。

オーク・シャノンをわしは大好きだ！

オークがロスアラモス国立研究所に勤める前、彼がまだ海軍にいたころのことだ。

TW：オークとは2時間話した。

彼はわしが1997年6月ごろと1997年4月にウィル・ミラーと話した内容を君に伝えるように勧めた。

L.キーンが書いたボストン・グローブ紙の記事の件だ。

そう、UFOの話だ。

— 墜落回収したUFO宇宙船と死体とか、UFO調査団[陰謀団]MJ12とかの話だ。

EWD：どんなことが記事に書かれたのですか？

TW：グリア/ミラー/ミッチェルの3人がペンタゴンの会議室でプレゼンをしたことが確認できた。

マイク・クロフォード提督、パット・ヒューズ大将[TWの上司]も立ちあっていたと[他にも立ち会った人はいた]。

1997年4月のことだ[エド・ミッチェルが1997年4月と言っていた]。

[集まりが解散したあと、ミラーとウィルソンは2人だけで2時間UFOやMJ12やロズウェルや墜落UFOや異星人の死体などについて話した。

TWは興味を示した。

— ミラーは米軍・情報機関が収集したUFO遭遇事件、さらには他国の政府が収集した遭遇事件の機密情報についても知っていた。

記録を見たことがあるという。]

TW: そう、ミラーは MJ12-UFO 陰謀団についてわしに質問したんだ。

墜落 UFO をめぐる話で。

〔後の 1997 年 6 月下旬に TW はミラーに電話してミラーの言うことは正しい、  
そのような陰謀組織は存在すると答えたことが確認されている。〕

EWD: あなたは何と答えたのですか？

TW: わしはその組織を見つけ、この目で見、話も交わした。

しかし誰も名前を言わなかった。

— そう言ったんだ。

EWD: 私宛のミラーの手紙をお見せしましょう。

2002 年 4 月 25 日付けの手紙です。

— 読んでみてください。

TW: (笑う) わしはミラーにすべては話していないぞ!

ミラーはわしがペンタゴンに関する公文書でどんな調査をやったかは知っている  
が、それ以上のことは知らない。

ミラーは異星文明のハードウェアが誰〔どの企業〕の手に渡っているか、深い知  
識に基づいた推測ができています。

ミラーにとっては割に合わないことだが。

フロリダの素敵な家やプライベートビーチをもつ特権を失いかねないからな!

(笑う)

TW: ミラーはどの軍需会社に目をつけるべきかについて良いアドバイスができる。

それが彼の知るすべてだ。

[話題が変わる]

— オークが JA についてすべてを語った (JA を信頼するな、嘘つきだ!)

BDM での AP-10 会議。

— 参考資料、ブルムの本。JA、ブルムの本、彼 [オーク] の会議での役割、参加者な  
どについて語った。

— オークが BDM 案件全体についてわしにブリーフィングした — 遠隔透視 (リモー  
トビューイング) プログラムについて 10 分間。

わしはこの遠隔透視について少し知っている。

— オークが君はチームプレーヤーであり、情報を漏らす気はないだろう。  
メディアと関わらず — あらゆる制限に従い — 政府に雇われておらず、許可証  
もないが、血筋は秀逸 — プロフェッショナルであり、履歴も非常に優れていると  
言った。

(以下は添付されたウィル・ミラーの手紙)

2190 Overbrook Ave.North  
Belleair Bluffs, FL 33770

2002年4月25日 (訳注：会談より半年前)

エリック・W・デイビス博士・CEO  
Warp Drive Metrics  
4849 San Rafael Ave.  
Las Vegas, NV 89120

親愛なるエリック

すぐ返事しなかったことを君とハルに謝らないといけない。  
戦争がこの先どうなるか分からない状況 (訳注：2001年から米軍が始めたアフガニス  
タン戦争のこと) や、現行の業務や、君の新しいメールアドレスをなくしたことなど  
が相まって、返事が遅れてしまった。  
後悔している。  
まず最初に君たちに聞かなくちゃいけないことがある。  
君もしくはハルは5月30日の夕方、フロリダ州タラハシーでボブ・ベックウィズ氏と  
会う気があるかな。  
ボブはフロリダ科学アカデミーの会長と強磁場実験所所長に会うことになっていて、  
彼 (ベックウィズ氏) の宇宙フォース・モデルと、空中浮揚・テレポーテーション・  
タイムトラベル実験等のテーマについて円卓で議論することになっている。  
この会議の日程はもう動かないと思うが、4月25日 (木) の電話会議で正式決定する  
はずだ。

次に、以前君とハルが私にしたいいくつかの質問に答えさせてくれ：

私は君とハルが現在携わっている墜落・回収 UFO の研究をアシストするつもりだ。

その研究は政府内（あるいは政府外）で行われているが、特別な配慮が必要で、以下の注意事項がある。

第一に君が作業や調査をする際に私の名前を出したり、ほのめかしたりすることは絶対に謹んでほしい。

今私の名前が出ることは何ら私の得にならないし、むしろ失うものの方が大きい。

第二に君たちに請求する金額は私が資料を収集精査する時間、さらには君たちがアクセスすべき連絡先のリストを作成するのに実際に要した時間の分だけにする。

私はこの作業にかかる時間を最小限にするつもりだ。

なぜなら最初に集める情報はそんなに時間を食わないはずだから（たぶん8時間以内）。

このような作業での私の時給は180ドルだ。

第三に君たちに渡すものはすべて国家安全保障上機密にする必要のないものだけだ。

私は最高機密情報〔S C I〕にアクセスする最高機密〔T S〕閲覧許可証や、今は機密になっていない「その他の」プログラムを閲覧する「特別」許可証ももっていたけれど。

なお私はこの許可証を今はもちたいと思っていない。

これは政府との現行の秘密契約に基づく仕事であり、「調査が必要」ということであり、しかも私がかつてもっていた許可証が特別アクセスプログラム監督委員会によって再発行されるように要望するという話を君から聞いたとき、私は再び機密の領域で働くことになるのだろうと思った。

さて本題に入ろう。その種の情報を入手したいという君たちの最終目標をめぐって君とハルとすべきさらなる話し合いをいつするかはひとまずおいておくとして、いま私が提供できるものは次の通りだ：

1. 墜落「航空機」回収作業（二次的ミッションとして）を含む「特別チーム」についての詳細。

これには以前機密だったF-177ステルス戦闘機も含む（ステルス戦闘機に限定されないが）。

この特別チーム、あるいはその後継チーム、さらにそれらを支援している上位組織、そしてチームの主要な2人の士官が君たちの求めている情報の一部

を提供するだろう。

2. エリア 5 1 とその関連施設で米国政府によって製造されている複製異星宇宙船 (ARVs) に関する直接情報を知っていると思える上級士官の氏名と最近の所属先。
3. 米国政府が関与した米国東海岸における重要な UFO 事件に直接関わったと思われ、さらには以前就いていた指導的立場、軍での高い地位、重要な軍事力を行使する立場のため、この事案に政府がからんでいることを直接知っていると思われる退役上級将校 (将官レベル) の氏名と現在の居場所。
4. 政府に雇われた民間人のリストも提供できる。彼らは過去または現在携わっている最高機密の仕事、現在保持している能力、許可証、専門職、関連する地域在住などのために、異星人由来のテクノロジー、UFO 墜落、着陸、その他の関連事案が伴う政府の仕事に現在関与し知見をもっている人物たちだ。

もし君たちが以上述べたことのいずれかに興味があれば、そう言ってほしい。

最後にお願ひがある。私はネバダ州ラスベガスにあるはずの会社を探している。その会社では数年前に軍隊や警察向けに「目つぶしスプレー」を製造していた。会社名は「1 Mark 株式会社」(当時の住所は 2300 W, Sahara Ave. Ste.500) だった。

その会社の副社長ジョー・ツッカロと私は知り合いだった。

彼や会社を探すためのいかなる手伝いも歓迎する。

敬具

ウィル・ミラー

TW: オークには時期が悪いと言っておいた。

— 君 [EWD] と話すのに良い時期じゃない。

— 忙しすぎる。

- オークにはこれ以上コンタクトをとるのは難しいと言った。
- オークは入退院を繰り返しているらしい。  
彼はストレスに極端に弱い。  
心疾患がある。悪いニュースだ。
  - 電話をかけてみたことがある。  
リンダがメッセージを入れておいたが、返事がなかった。  
リンダは怖くてオークとあまり関わりたがらない。  
頼んでもハイもいいえも言わなかった。
  - 私もリンダのその気持ちを考慮した。  
3年がたって私は退役した。
  - [2002年]7月に米国防情報局を辞めた。
  - ジャコビー提督と交代した。

TW: いくつものプロジェクトを完成させるために特別実験エリアで働き始めた [彼はこれを1998年に始めた]。

- この仕事の後継者には時間や知識の欠如で困らせてはならない。  
視察ツアー/監査を行った。もう一般人には戻らない覚悟。  
NNSA (国家核安全保障局) が準備したツアーだった。
- リッチとダグ
- 君 [EWD] は彼らを知っている。
- AFIO (退役情報将校協会) のメンバーだ。
- ラスベガスでの新たな展開には公共の会場で話すゲスト講師たちが必要であると話した。
- 資金・会員を増やす等。  
リッチとダグは君 [EWD!] のことを話していた。
- ワシントン DC から電話があった。
- 君の NASA 論文と関連資料のコピーを私に送ってきた。
- 君の専門のワームホール論だ。  
太平洋空軍の命令書、米国 ID、ロッキードのスライド、わし (訳注: EWD?) が NASA に書きたいいくつかの報告書なども送ってきた。

EWD: それはいつのことですか？

TW: 9月、感謝祭の前だ。

リッチとダグがわしの米国防情報局でのキャリアや、経歴やミッション、そのミッションで私が果たした役割などについて君に話すべきだと提案してきた。わしはそれから君の論文を読んでみて、その提案の意味がよりよく理解できた。そこで彼らにそう告げた。すると彼らは準備してくれた。— オークが電話をしてきたことを思い出す。彼が私に送ってきたもの、君について彼が言ったことなどを。

TW: あなたはどうしましたか？

TW: 事務方が身元調査をした。

ダグとリッチがわし自身のデータを確認したいと申し出た。

AFIO（退役情報将校協会）が保証した。

協会の連中と現在ベガスにいるワシントン DC の連中が保証してくれた。

TW: 真剣に検討すると言ってきた。

— 1999 年にかけてきたオークの電話を思い出す。

オークは君を強く支持した。

— 議論もかなりした。

EWD: どんな議論でしたか？

TW: 君が報道機関や各種団体（UFO 関連など）に話さないこと、

メディアに関わらないこと、

ミラーやグリア、それに関わる連中に話さないこと、

世間の注目、金銭、名誉、評判などに強い関心を示さないことなどについてだ。

EWD: [私たちは私の経歴について話しながら時を過ごした。

— 私が空軍や NASA やその他関連する組織で行った仕事などについて彼が質問し、それに答えた。

空軍での仕事の詳細、やったこと。

受けた教育、キャリアの選択など。

NIDS（防衛研究所）には触れなかった！！

オークは 1999 年に JA や私や NIDS について言及したが、語られたのは名前だ

けだったという。]

TW: [怒り狂う — ミラーに対し激怒する (顔の表情はこわばり、怒声を発す)。  
— 個人的にも職業的にも信頼を裏切られた — 特に情報局の同僚、海軍士官たちの  
信頼を裏切った。  
— 海軍では士官の間に連帯感 — 友愛がある。 — その連帯と秘密保持が損なわれ  
た。]

EWD: どうやって?

TW: ミラーがグリアに情報局で話されていることをしゃべったんだ。  
よりによってミラーがグリアにしゃべったんだ。

[EWD メモ: ミラーが話した相手はエド・ミッチェルだった。そのことをミッチェルが 1999 年に私だけに教えてくれた]

TW: そのあとミラーはキーンに話し、ボストン・グローブ紙の記事が出た。  
— ミラーがキーンに何を話したかは定かではないが、記事はわし [TW] に言及  
していた。  
— [怒り狂う]  
— あらゆる方面から電話がかかってきた。

EWD: どんな電話でした?

TW: 嫌味な下らないジョーク、下らないコメント、[わしが UFO やバカげた UFO グループについて話したことに]驚いたというコメントや、嘲笑うコメントなどだ。

EWD: どんな人が電話してきましたか?

TW: ペンタゴンの同僚 (海軍将官) や、部下や、民間のエンジニア、わしが働いている情報局の連中だ。  
記事について電話してきたんだ。嫌だった。

TW: 君に話すのは賭けだ。

- しかしオークの言葉を信じることにする。  
わしにとって悪いことにはならんのだろう。
- わしらは一緒にオークと面会すべきだった。  
しかし彼の今の健康状態ではそれができない。— 残念だ！
- こうしてわしは君に賭けることになった。

TW: リッチとダグが君のことを保証している。— 君の意見は彼らに有益だという。AFIO（退役情報将校協会）からの保証は信用できる。

- 君（EWD）は良いチームプレイができる人物だということだ。
- 身元調査は済んでいる。— 問題な点はない。
- 韓国での経歴も良い。空軍は君を信頼している。
- 会談時間が押しているので、どんどん進めよう！
- もし君がわしの信頼を裏切ったら、君と今後会うことは拒否するだろう。
- シャベったことをすべてなかったことにする。  
このテーマで人（許可証なしの人）と会うことはもうしない。
- このことに言及すること自体セキュリティ侵犯になるので、あまりにリスクイ  
だ。
- 極秘情報だ。— とんでもなく厳格に秘守された情報だ。
- 極秘プロジェクトグループの中でもこのプロジェクトのようなものは一度も見たことがない。

EWD: OK、それでは 1997 年 4 月に起こったことを話していただけますか。

TW: ミラーと別れたあと [1 週間後だったと思うと TW] — わしは電話をかけ、いくつかの施設を訪れ、話し合った。

- そんなことを 1 か月半ほど何度も続けた。
- ワード（M・ワード将軍）からの提案で OUSDAT（防衛装備次官事務局）にある公文書類（索引システムのようなもの）に目を通すことにした。
- 1997 年 5 月にたまたまビル・ペリーに会ったさい、この件についてそっと聞いたところ、彼も同じことを提案してくれた。
- 次官事務局の連中が私に話してくれたのは通常の SAP（特別アクセスプログラム）に属さない特別な重要プロジェクトのことであり、非認可・分離放出・放棄されたプログラムを行う特別な小集団だった。  
それはペリー自身が 1994 年に組織した通常の SAP 部門には属していなかつ

た。

他のグループから分離され、通常の SAP 側からは見えなくなっている。

EWD: 防衛装備次官は誰でしたか？

TW: う〜ん、それはポール・カミングスだ。

ポールとマイク・コステルニック〔米陸軍准将〕と話をした。

EWD: マイケル・コステルニックですか？

TW: ポールの事務局〔防衛装備次官事務局〕で話した。

マイクは防衛装備次官事務局の局長だ。

この事務局は 1994 年にペリーによって組織〔再組織〕された。

— マイクは SAPCO（特別アクセスプログラム調整局）の局長でもある。

— マイクは調整局長の資格のもと、SAPOC（特別アクセスプログラム監督委員会）のメンバーであり事務総長を務めている。

— マイクは上級審査委員会のメンバーだ。

〔TW は当時、米国防情報副局長であり J-2 職員の副統合参謀長。

彼の上司は米国防情報局長のパトリック・ヒューズ大将だった。〕

TW: わしは索引要約を読んで通常とは異なる公文書類を見つけた。

EWD: グループの予算について記載はありましたか？

TW: 予算の記載はなかった。予算は監査目的で別の記録簿に記載されているのだが。

— セキュリティ予算記録は「プログラム」フォルダにコピーしてある。

— マイクに聞いたら、そのグループの予算は 2, 3 回プログラムフォルダに入ったが、基幹プログラムの 6, 7 倍もの予算額になっていることがあった。

ペリーはこの額をトンデモなく高いと思って調査をしようとしたが、やめろと言われた。

EWD: 誰がペリーにそう言ったのですか？

TW: ペリーはその件についてのわしの質問に答えてがらなかった。

彼はジュディ・ダリー〔防衛装備次官事務局内の先行開発部門防衛副次官〕から何か聞けるかもしれないと言った。

TW: 彼女は電話で教えてくれたが、セキュリティ予算や他のプログラムの予算記録は改訂され、グループの公文書保管庫に移されたという。

セキュリティ予算は累積され、年次では記載されない。

年次で記載されるプログラム予算と同じようにみなすと誤解が生じることが容易に分かるだろう。

6, 7倍というのは2, 3年分累積されたトータルの数字かもしれない。

セキュリティ予算のレポートにはこれまでもこの種のエラーが生じてきたと言う。

TW: ペリーはこれらの案件をすべて再編成、強化し、監査の透明性を改善しようとした。

EWD: テーマを変えます：あなたが見つけたのはどの分野の特別アクセスプログラムだったのですか？

TW: 最高機密だ。— 言いたくない。

EWD: コードネームは？

TW: これも言いたくない。— 最高機密だ。

EWD: そのプログラムを実施しているプロジェクト事業者はどこですか？どの政府機関ですか？

TW: 航空宇宙テクノロジー企業だ。— 米国でもトップクラスの1つだ。

EWD: どこですか？

TW: 最高機密だ — 言えない。

EWD: 防衛産業ですか？

TW: そうだ。その中でも最大手のところだ。

EWD: 情報機関もからんでいますか？

TW: それも含んだ共同事業だ。

EWD: ヒントをもらえますか？

TW: すまないが、それはできない。

EWD: あなたがそのプロジェクト実行部門を見つけたとき何が起こりましたか？

TW: わしはいくつも電話をかけた[1997年5月末]。

まずはポール、そしてマイクとペリーに電話した。

わしが見つけたのが間違いなくプロジェクトを運行する当の事業者でありプログラム管理者なのかを確認するためにだ。

EWD: 彼らは肯定したのですか？

TW: そうだ。

EWD: それでどうなりました？

TW: [1997年5月末に]プログラム管理者に3度電話した。

そのうちの1つはセキュリティ監督官と顧問弁護士との電話会議だった。

— 彼らの側で混乱が生じた。

なぜわしらが彼らを探していたのか、わしらが彼らに何を望んでいるのか、何を知らうとしているのかと。

— 彼らの口調はつっけんどんだった。

EWD: どういうことですか？

TW: 彼らはわしの電話に動揺したんだ。— 電話に驚かされたんだよ。

EWD: あなたが彼らに質問したことに？

TW: そうだ。

EWD: どんなことを尋ねたのですか？ — どんな言葉で？

TW: わしは彼らに防衛装備次官事務局の特別公文書類の中に彼らのプログラムに関する文書を見つけたと言った。

そして彼らの墜落UFOプログラムについて知りたいと言った。

そのプログラムで彼らが果たしている役割は何か、彼らは何を入手しているのかなど。

彼らが墜落・回収 UFO に関連した MJ-12 やその種の組織について聞いたことがあるかとも尋ねた。

EWD: その電話に対する返事はあった？

TW: あった！

わしが彼らに電話する前に誰と話したかと聞いた。

わしはそれに答えた。

すると彼らはわしの答えに不満を示した。

EWD: ペリーやポールたちと話したと答えたのですか？

TW: とんでもない！

ペリーやポールたちと話したことを彼らに言ったりはしないよ！

EWD: あなたは他に誰と話しましたか？

TW: 他に電話したプログラム管理者たちがいた。

EWD: あなたはそのことを前に言いませんでしたね！

TW: 言ったように思っていた。

EWD: その人たちは誰ですか？

TW: 3人のプログラム管理者たちは自分たちは私が探している者ではないと言った。  
4人のプログラム管理者たちは、私に3人組のことを告げた。

EWD: なぜ4人のプログラム管理者たちが教えてくれたのですか？

TW: なぜなら彼らはそのグループの一員だったからだ。

グループ内の異なる分派だったり、分派ピラミッドの異なる層だったり、振り分けられて別の作業をしたり、同じ作業の一部をやったりしている。  
彼らは公文書では同一の分類項に入っているのだけれど、互いの関わりは明瞭ではない [このグループに典型的なことだが、公文書としてはふつうではない]。

EWD: それからどうなりましたか？

TW: わしは3人組と話した。公式のブリーフィング、見学などを申し入れた。  
— わしは米国防情報副局長であり J-2 職員の副統合参謀長としての取締役的権威を使用した。  
わしがブリーフィングを受けていないのは君たちの手落ちだ、これを正す必要があると彼らに言った。  
わしは強く要求した！

TW: 彼らはこれ [TWの要求]を検討する必要があると言って電話を切った。  
2日後に彼らから電話が来た。  
彼らは電話で話すことは避けたいと言い、彼らの施設で行う対面の会合を手配した。

EWD: あなたは行ったのですか？

TW: そう、10日後に [6月半ばくらい]。  
勇んで行った。  
— 彼らの安全な施設内の会議室で会った。

— 3人が登場した。

EWD: あなたが電話で話した3人の男ですか？

TW: そうだ。その3人だ。

- セキュリティ監督官（元米国家安全保障局勤務のコーポレート・アイデンティティの専門家）
- プログラム監督官
- 顧問弁護士
- 彼らは自分たちを「監視委員会」または門番と呼んでいた。

EWD: なぜそんな名称なのでしょう？

TW: わしがそれを尋ねると、彼らはこう言った。

彼らの正体がほとんど明かされかけた大惨事と言える事件のあと、彼らのグループを守る必要から生まれた委員会だと。

これは当時の特別アクセスプログラムを監督するペンタゴンの2、3の委員会の同意も得たことだと。

その時期は明確ではないが。

EWD: その大惨事とはいったい何ですか？

TW: 最後まで話を聞いてくれ！

— 彼らが言うには、数年前ある監査が彼らのグループに入った。

それは想定外のことだった。

すんでのところまで万事休すになるところだった！

— 両者の間で泥仕合が行われた。

この争いには調査官と彼のペンタゴンの上司が加わった。

プログラムの透明性をめぐる綱引きだった。

彼らが言うには、資金が問題になった。

彼らが身を潜めていたこと自体がもうひとつの問題になった。

— 脅迫まがいのことが、彼らの正体を暴くために行われた。

そこで彼らは退却し、調査官が仕事を全うすることを受け入れた。

— [彼らはプログラムを隠し通すために頑張った]

EWD: それでどんなことになったのですか？

TW: 調査官は公式にブリーフィングを受け、見学をし、彼らのプログラムを見ることができた。

EWD: 彼らは宇宙船を調査官に見せたのですか？

彼らが言うハードウェアとは「異星人」のものでしょうか、UFO 由来の？

TW: この件で彼らはそれ以上のことは言わなかった。

— この事件のあとペンタゴンの連中（SAPOC: 特別アクセスプログラム監督委員会）と将来同様なことが起こらぬように公式の合意がなされた。

同じことを繰り返したくなかった。

— 特別な基準が作られ合意した。

詳細：雇用者管理委員会によって厳格に定められたアクセス基準内に収まる特別な状況が決められた。

— 公務従業者はアクセス基準に合わない場合、資格証明書や地位に関係なく誰も彼らにアクセスできず、雇用者管理委員会（/プログラム管理者、弁護士、セキュリティ管理者）の管理に従う。

— まさに彼らのやり方に従えないなら諦めろということだ。

EWD: 基準は何ですか？

TW: わしもそれを聞いたが、彼らは答えることを拒否した。

わしは怒り狂った。

この拒否の意味は、少なくとも彼らが公的監視や正当な理由なしに勝手にオペレーションをしているということだ。

政治的に危険な場になっている！

— [3人組がTWと話す時は、ペンタゴンか、それ以外のところから電話/FAX/emailをしてきた。

彼らは新たな秘密の暴露を恐れて会話内容の慎重な扱いを求めた。]

— 彼らの話し合いの目的はわしにそれを伝えることだった。

EWD: それとは何ですか？

TW: わしが介入することを拒否するということだ。

EWD: なぜ？

TW: 彼らが言うにはわしの資格証明書はすべて確認したし有効だが、機密アクセス許可リストに私が載っていないという。

— わしの資格だけでは足りない。

— わしは特別基準に合わないので、アクセス権限付与が許可されないことを知るべきだという。

— これらの点をめぐって彼らと押し問答が続いた〔主にセキュリティ監督官や弁護士と〕

TW: さらに議論した。

わしは米国防情報副局長であり、法に定められて監督規制の権限をもつ。

その権限によって知る権利がある〔監督、監査、許可などなど〕。

彼らはそのわしの監督下にあるという論拠を受け入れようとしなかった。

— 米国防情報副局長としての規制権限は彼らのプログラムの性質と関わりがないという！

— そして彼らはわしを説得するために彼らの数ページの長さの機密アクセス許可リストを持ち出した。

1990年作成、1993年改訂のリストだった。

EWD: リストには誰が載っていましたか？ご存知の名前がありましたか？

TW: それは極秘事項だ。

— おおかたはプログラムの雇用者だったと言っていいだろう。

名前や肩書〔担当の肩書〕。

民間人ばかりだった。軍人は見受けられなかったが、いる可能性はある。

EWD: 政治家は？

TW: いない。

— ホワイトハウス関連の名前はない。大統領もいない！

- 国会議員もいない。
- 国会職員もいない。

EWD: クリントンやジョージ・ブッシュ陣営の名前は？

TW: ない！しかしペンタゴンの連中は何人かいた。

防衛装備次官事務局の者は少なかった。

別の部署の者が1人、ペンタゴンのエンジニアとして働き NSC（国家安全保障会議）のメンバーでもある者が1人いた。

— プログラム監督官が言うには彼らがやっているのは：

兵器開発プログラムではない。

諜報活動のプログラムでもない。

特殊作戦や兵站のプログラムでもない。

以上のカテゴリーには当てはまらない。

— わしはじゃああんたたちはいったい何者なんだと聞いた。

— するとプログラム監督官が大きなくめき声を出した。

— セキュリティ監督官と弁護士が言ってもいいと言った。

EWD: で、何と言ったんですか？

TW: 彼らがやっているのはリバースエンジニアリング（分解解析）だと。

— 何年も前のことだが、回収された物があった。

— テクノロジー関連のハードウェアが回収されたという。

— そこでわしは彼らが言っているのはソビエトか中国などのハードウェアのことだろうと思った。

ミサイルや機密情報プラットフォームや航空機とかをリバースエンジニアリングしたのだと。

実際、外国の機密収蔵品を見つけ、リバースエンジニアリングをするための会議に出たことがある。

その場合「UFO」の名称を隠蔽のために使ったものだ。

— そこでわしはそう言った。

すると彼らは自分たちがやっているのはそれでもないと言う。

— [プログラム監督官が話す] 彼らは機体を所持していると言った。

無傷の機体であり、飛行できるはずだと言う [宇宙を？空を？水中を？次元間を？]

- それは外国のものなのか、それとも違うのか？と聞いた。
- すると違う！と言う。それはありえない、不可能だ！と言う。
- なぜ？とわしは聞いた。じゃあその機体はどこのものかと。
- プログラム監督官は自分たちはそれがどこのものか知らないと言った。  
[しかし彼らにはこの機体について思い当たるふしがある]— それは**地球由来のテクノロジーではない。人間がこしらえたものではない。人間の手が作ったものではないと。**
- 監督が言うには、自分たちはそのテクノロジーを理解し使用しようと試みた。  
このプログラムは何年も何年も非常に遅い歩みで続いた。
- 苦痛を覚えるほど遅い歩みで、成果は少ないかゼロだった。  
共同作業をするわけにいかないのがつらかった。  
作業を手伝ってくれる外部の専門家たちや設備がないのだ。  
外部と遮断した状態で自分たちの設備や認可した人間を使うしかなかった。  
仕事をするには厳しい環境だった。  
働いているのはおよそ 400~800 人（機密アクセス許可リストでカウント）。  
人数が変化するのは資金の変動や人員交代のため。
- わしはミラーからの情報をぶつけてみた：
  - ロズウェル — 宇宙船/死体/解剖
  - ホロマン空軍基地での UFO 着陸
  - MJ-12&漏洩した機密書類
  - サモラ UFO 事件&ベンウォーターズ空軍基地 UFO 事件など
- 彼らは押し黙った。この件の議論を断った。
- TW は SAPOCO（特別アクセスプログラム監督委員会）に訴えに行き、彼らのプログラムへのアクセス権を手に入れるぞと脅した。
- 彼らはどうぞやってくれ、あなたの勤めを果すがいいと言った。
- わしは怒った。道理にかなったわしの権威に従わなかったからだ。  
彼らはガンとして譲らなかった。
- 彼らの口調は会話の間、終始つっけんどんでそっけなかった。

EWD: どんな結果になりましたか？

TW: 会談は決裂して、わしはワシントンに戻った。

EWD: コーソ事件についてはどのようにお考えですか？

TW: グリアが4月9日にコースについて話してくれた。

- ミラーは私と2時間個人的に話していたとき、その本を見せてくれた。
- その本を読み切る時間はなかった。
- 自分で買うこともしなかった。
- コースのことは会談で話題に出さなかった。
- しかしわしが会談で知ったことをコースのストーリーに重ねてみると、コースが「異星人の」ハードウェアを見たという話は真実を語っていたのだと十分信じられる。

EWD: あなたは SAPOC (特別アクセスプログラム監督委員会) に訴えたのですか?

TW: ああ、訴えた。委員会の下部組織 (上級審査グループ) の委員たちに電話してペンタゴンで会議を開いた。

- 彼らに会談で起こったことを話した。
- すると彼らはその事業者のアクセス拒否は続行させると返答した。
- しまいには彼らとしばらく言い争いになった。
  
- 20分後に解散した。彼らは2, 3日後に私と会いたいという。
- 2日後〔6月末近く〕に電話がきて、また上級審査グループの面々と会った。

EWD: それはいつのことですか?

TW: 6月の下旬[1997年]より前だ。

- かれらはこの事業を継続させるとわし[TW]に言った。  
あなたはこの件から直ちに手を引いて、その事業に手だしするなど。  
このプロジェクトを監督する権限はなかったのだ、あなたの監督下にはなかったのだ等々。  
だからこの件は忘れろと。
- わしは非常に腹を立てた。  
わしは口を閉ざすべき状況だったにもかかわらず怒鳴り始めた。

EWD: ミラーとグリアはあなたが降格処分を受けそうだったと言っていましたよ。

TW: そう、処分寸前だった！

— ミラーにも言ったのだが、上級審査グループの議長はもしわしが米国防情報局長への昇進もなくなるぞという警告に従わなかったら、階級章の星の1つや2つ失って早期退職させられだろと言ったのだ。

— わしは怒り狂った — 我を忘れるほど激怒した!!!

— ペンタゴンで信任を受けているわしの地位を考えれば、なぜこの件でこんな酷い目に遭うのだと。

— わしは彼らのプログラムを規制する公的権威をもっている。

— これがわしの地位だ!!!

EWD: それは情報局の資金調達をあなたが決める、あるいはあなたを通じて決めているから、ということですか？

それとも国防情報局長が決めるのですか？

TW: 最高機密だ。答えられない。

EWD: 機密アクセス許可リストの話に戻ります。

あなたはリストに載っている人物たちのタイプを言えます？

TW: 委託契約の人たちだ。科学者や技術者たち、エンジニア、科学者、監督官など。

EWD: 軍人はいました？

TW: いなかった。防衛装備次官事務局の職員たちはいた。

特別アクセスプログラム監督委員会のメンバーは2人。

ペンタゴンの別の部署のメンバーが1人いた。

— 1997年12月にポールが防衛装備次官を退職し、政府職員でなくなった。

マイク・Kも防衛装備次官事務局長を交代した。

EWD: 誰と交代したのですか？

TW: ジャック・ガンスラーが新任の次官だった。1997年12月に就任した。

マイク・Kの後任はM・ウォード准将〔空軍〕だった。

EWD: ポール・K、マイク・K、ジャック・ガンスラー、ウォード准将たちは機密ア

クセス許可リストに名前が載っていましたか？

TW: それには答えたくない。

TW: 1997年6月の会合でわしが経験したことを1998年1月にガンスラーに話した。  
ガンスラーは既に何者かにブリーフィングを受けていた！驚きだった。

EWD: 彼はなんて言ってましたか？

TW: 「UFOは実在する。いわゆる“エイリアン・アブダクション”は存在しない。」  
ガンスラーはそう言った。

EWD: 他には？

TW: この件から手を引きなさい。この件については二度と議論しないと書いた。

EWD: ハル・パソフやキット・グリーンと話す気はありますか？

[この2人が何者かや、遠隔透視プログラムの履歴について話し合った]

— TWは2人の名前には聞き覚えがなかった。

遠隔透視プログラムについては1990年に聞いていた。

— TWはおそらくハルとは合わない。考えておくと言う。

— キット・グリーンについてはTWから返答がなかった。

— TWが言う：この件については今後二度と話したくない。他の誰とも。  
露見のリスクがある。

これ以上話を続けるのはやめた方がいい。これで中止にすると。

TW: 君〔EWD〕はこの件をどう扱うつもりだ？

EWD: 個人的な研究のためだけに使います。

データを集めますが、それによってことの経過を追跡し、メディアに現れる兆候や誤情報、政府筋からの情報などを確認するつもりです。

口外はしません。などなど。

メアリー・エリザベス/エリオット-TRW事案、インゴ事案、ライトパターソン空軍基地を訪問した1974年の遠隔透視能力の女性の事案などについて手がか

りを見つけるつもりですとウィルソンに告げた。

TW: [返事]

- メアリー・エリザベスの件は彼女が伝える情報や弁護士 [ジェフリー・W・グリフィス] の態度から判断して本当のことにように思える。
- 今から 30 年後、彼女が今わの際にでも告白すればすべてが明らかになるだろう。
- インゴやアクセルロッドやライトパターソン空軍基地の遠隔透視能力の女性のことは知らない。  
彼らについては情報源から話を聞いていない。
- コーソの本を要望 [送ることにする]。

EWD: [ノート]

- TW は私の仕事[NASA/空軍研究所]を要約紹介する著作物を要望。
- 私が送りたい他の書類があれば、それも送る。
- ワシントンDCにある事務局のメールアドレスをもらった。
- TW は引退後中西部に移り住み、事務局は 2003 年に閉鎖するつもりだという。